

# ふるさと兵庫の川づくり

シンポジウム

## 開催報告

主催 兵庫県

後援 国土交通省近畿地方整備局

協力 (一社)建設コンサルタンツ協会近畿支部  
(一社)兵庫県建設業協会  
(一社)兵庫県測量設計業協会

# 目 次

シンポジウムについて .....	1
プログラム .....	2
出演者紹介 .....	3
議事要旨・開催状況 .....	4
『川のある風景フォトコンテスト』入賞作品紹介.....	30
新聞記事 .....	32

## シンポジウムについて

兵庫県は「治水・利水」の観点に加え、「生態系」「水文化・景観」「親水」の四つを柱として川づくりを進めるため、1996年に「ひょうご・人と自然の川づくり基本理念・基本方針」を策定し、安全で自然と調和した個性豊かな川づくりに取り組んできました。

「ふるさと兵庫の川づくりシンポジウム」では、「基本理念・基本方針」策定後の20年の川づくりに関する取り組みを振り返るとともにひょうごの川の魅力を再確認し、県民の皆様とともにひょうごの川を未来へつなぐ取組について考えることを目的として開催しました。

シンポジウム当日は基調講演やパネルディスカッション等を通じて、来場した約220名の参加者とともに、20年の取組やこれからの川づくりについて考えました。

また、会場内では県内の川づくりに関する取組をパネル展示により紹介するとともに、川のある風景フォトコンテストで入賞した作品も展示しました。



## 開催日時・場所

- 日時 2019年2月23日(土) 13:00～17:00
- 場所 神戸市立御影公会堂

## プログラム

### 表彰式

### 「川のある風景フォトコンテスト」表彰式

1

#### 開会あいさつ

荒木 一聡 兵庫県副知事

2

#### 基調講演

### 「気候変動下における環境と防災の統合」

島谷 幸宏 九州大学大学院 工学研究院 教授

3

#### 取組報告

### 「ひょうご・人と自然の川づくりの取り組み」

三橋 弘宗 兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員

#### 休憩

15分

4

#### パネルディスカッション

### 「川の魅力発見と未来へつなぐ川づくり」

コーディネーター

道奥 康治 法政大学デザイン工学部 教授

パネリスト

小谷 正美 田君川バイカモ保存会 前代表

佐川 志朗 兵庫県立大学大学院 地域資源マネジメント研究科 教授

白神 理平 武庫川流域圏ネットワーク 事務局長

五名 和雄 平福地域づくり協議会 会長

田中 ひろみ 赤穂市立高雄小学校 教頭

三橋 弘宗 兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員

コメンテーター

島谷 幸宏 九州大学大学院工学研究院 教授

5

#### 閉会

## パネルディスカッション出演者

### コーディネーター



法政大学デザイン工学部  
都市環境デザイン工学科  
教授

みちおく こうじ  
**道奥 康治**

- 神戸大学工学部助教授、教授を経て2014年より現職。
- 2002年より兵庫県河川審議会委員へ就任し、2014年より同会長を務める。日本学術会議連携会員。
- 専門は河川環境・環境水理学で貯水池など停滞水域の水質水理学、自然材料を用いた河川構造物の水理設計などに関する研究に従事。
- 2017年に兵庫県功労者（県政功労）を受賞。

### パネリスト



田君川バイカモ保存会 前代表  
特定非営利活動法人バイカモ楽農会  
理事長

こたに まさみ  
**小谷 正美**

- 2000年に「田君川バイカモ保存会」を発足。2017年まで代表を務める。
- 行政機関や地元の子供たちと協力して、絶滅寸前だったバイカモを保護し、周辺環境を保全する活動を行っている。
- 2016年度「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞。



平福地域づくり協議会  
会長

ごみょう かずお  
**五名 和雄**

- 「平福地域づくり協議会・平福上町自治会」会長を2016年度より務める。
- 平成21年台風第9号災害復旧後、平福地区の川端風景と調和した石積護岸・遊歩道などを有効活用し、景観に配慮した地域の歴史的遺産や観光資源をガイドする。
- 2016年度からは、利神城跡国史跡指定に向けて、川端風景など、歴史的遺産を活かした取り組みを計画・実施している。



兵庫県立大学大学院  
地域資源マネジメント研究科  
教授

さかわ しろう  
**佐川 志朗**

- 建設コンサルタント会社、独立行政法人土木研究所自然共生研修センター専門研究員等を経て2012年より現職。
- 2012年より円山川水系自然再生推進委員会委員、2014年より円山川流域懇談会委員を務める。
- 専門は応用生態工学、河川生態学で、魚類や両生類などの水辺の生き物のハビタットの研究、河川や水田を含む流域の自然再生に関するプロジェクトなどを行っている。



武庫川流域圏ネットワーク  
事務局長

しらかみ りへい  
**白神 理平**

- 「武庫川流域圏ネットワーク」の事務局を2011年設立時より担当。
- 武庫川流域圏で活動する諸団体や個人を会員とするネットワークで、「流域連携による武庫川づくり」に取り組む。
- 参加団体の活動情報の共有化、武庫川ネット活動報告会の開催、武庫川の自然探索を兼ねた河川敷清掃、特定外来種オオキンケイギクの駆除等を行っている。



赤穂市立高雄小学校  
教頭

たなか  
**田中 ひろみ**

- 赤穂市教育研究所自然研究部会所属時代に、千種川水系の水生生物や河川の環境に関心を持ち、赴任した学校で、川や海など地域のもつ自然環境をテーマとした環境教育に取り組む。
- 現職の赤穂市立高雄小学校では、児童や地域住民とともに、絶滅危惧種ハマウツボの保護活動や観察会を行っている。

### コメンテーター



兵庫県立人と自然の博物館  
主任研究員

みつはし ひろひさ  
**三橋 弘宗**

- 兵庫県立人と自然の博物館研究員を経て2004年より現職。
- 2013年より兵庫県環境影響評価審査会委員、武庫川水系専門検討委員会委員長、2015年よりひょうごの川自然環境調査アドバイザー等を務める。
- 専門は河川生態学、保全生態学等で県内の多くの河川で多自然川づくりのアドバイスなどを行っている。



九州大学大学院 工学研究院  
教授

しまたに ゆきひろ  
**島谷 幸宏**

- 建設省土木研究所、国土交通省九州地方整備局武雄河川事務所長を経て2005年より現職。
- 土木学会土木広報センター副センター長を務める。
- 専門は、河川工学・河川環境で、河川、湖沼、湿地などの自然再生、河川景観の保全、総合的な流域管理に関する研究を行っている。

# ふるさと兵庫の川づくりシンポジウム 議事要旨

## ○「川のある風景フォトコンテスト」表彰式

- |         |            |         |            |
|---------|------------|---------|------------|
| ＜最優秀賞＞  | 「清流に咲く梅花も」 | 羽田 薫 様  |            |
| ＜優 秀 賞＞ | 「楮の川さらし」   | 深町 知行 様 | (※表彰式はご欠席) |
| ＜優 秀 賞＞ | 「健やかに。」    | 丸一 明 様  |            |
| ＜優 秀 賞＞ | 「武庫川桜並木」   | 荒木 正夫 様 |            |



## 1 開会あいさつ

【荒木一聡・兵庫県 副知事】

本州の都府県において、南北が海に面し、河川が東西南北に流れているのは兵庫県だけです。また、兵庫は5つの国からできており、川の様相もさまざまです。フォトコンテストの応募作品の中にも、その5つの国のさまざまな様相を見ることができ、「兵庫県は本当に美しい」と改めて思いました。

さて、兵庫県における川づくりの基本的な考え方を示した「ひょうご・人と自然の川づくり基本理念・基本方針」を策定してから20年以上が経ちました。

この基本理念は4つの柱で構成されており、1つ目は「安全ですこやかな川づくり」です。これは、河川整備を計画的に行って雨水を流す、流域で雨水をためる、災害に備えることであり、これらを踏まえて平成24年には総合治水条例をつくりました。

2つ目は、「自然の豊かさを感じる川づくり」です。本日は、パネルディスカッションにて各パネリストの方々から、バイカモ、ハマウツボ、コウノトリなどを対象とした、自然・生態系との調和についてのご紹介があらうかと思えます。

3つ目は、「流域の個性や水文化と一体となった川づくり」です。それぞれの流域には個性があり、いろいろなまちづくりの中で川の整備も進められています。特徴的なものとして、武庫川、篠山川、加古川上流を経て円山川につながる「ふるさと桜づつみ回廊」が挙げられます。



4つ目は、「水辺の魅力と快適さを生かした川づくり」です。佐用川では、平成21年台風9号による大きな被害を受けましたが、災害復旧とあわせて、遊歩道整備などの親水性に配慮した取組も行いました。

本日のシンポジウムを1つの機会として、今後とも、地域の皆様との共有財産である川をつくり、守り、育てていきたいと考えています。



私は、兵庫県とはいろいろなおつき合いがあり、コウノトリの野生復帰をするときの保護増殖委員として、佐用川の水害や淡路島での水害のときにはアドバイザーとして、いろいろとアドバイスをいたしました。本日は「気候変動下における環境と防災の統合」という題でお話をいたします。

近年、洪水が頻発し、特に西日本全体で毎年のように水害が起こっており、これからも大きな水害が増えていくであろうと思われま



一方で、人口減少に伴って過疎化が進み、このような災害をきっかけとして、地域の人口がますます減少していくという問題があります。

また、川というのは、恵みを私たちに与えるとともに、リスクをもたらします。日本では古代から米づくりにおいて、水を容易に手に入れられるように、川が氾濫する場所に水田をつくってきたため、人々はどうしても川に対して、恵みを最大化してリスクを抑えるということを絶えず考えてきたわけです。

もう一つお話ししたい観点としては、川の環境についてです。川の環境というのは、人と人をつないで地域の軸になります。人と人をつなぐことが災害に強い地域をつくるという相互関係があることから、環境と災害は表裏一体なのです。また、中山間地や農村部での災害と、都市部での災害ではいろいろと違いがあります。本日は私たちが災害に対してどのように向き合っていけばよいのかを考えていきたいと思

さて、最近、グリーンインフラという言葉が少しずつ聞くようになりました。自然環境をもう少しインフラとして使おうというのがグリーンインフラです。世界ではグリーンインフラを使った防災が主流になってきました。さらに進化して、防災の部分を取り出したのがEco-DRR（エコ防災）と呼ばれているものです。

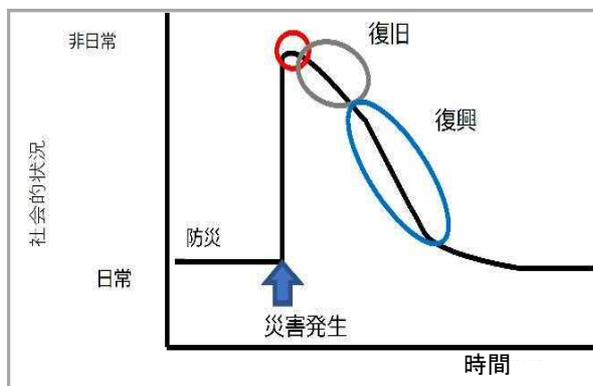


日本では、川沿いに木を植えて水害を防ぐという伝統的な工法が様々なところで行われてきました。奄美大島のマングローブ林は高潮のエネルギーを削ぐため、非常に大きな防災効果を持っています。日本で最も伝統的な工法で大きな自然の力を使った防災というと海岸林だと思います。風、砂、高潮を防ぎ、津波も若干防ぐ、こうした工法が非常に注目されています。

近年、洪水が頻発し、世界的にも防災について議論されるようになる中、私たちが使っていた伝統的なソフト対策技術も含めた災害防止が必要ではないと言われるようになってきました。これがグリーンインフラや Eco-DRR などが世界の大きな潮流になってきた1つの理由です。

災害は、日常生活の中で突然発生し、瞬間的に非日常になります。従って、普段からの備えがなかなかできていないというのが現実の問題です。

「復旧」は、災害が起きた直後、非日常の中で行われます。壊れたものを元に戻すということは社会的には大きな問題になりません。一方で、「復興」は非日常の状態が始まり、日常の中で終わることになります。災害が起こったとき、この町はこういう形でいい環境をつくらうということをあらかじめ考えていなければ、なかなか災害の復興でいいものをつくることは難しいです。



災害と日常性の関係

従って、本日のようなシンポジウムの際はとても大切です。日常的に環境のことを考え、日常的に川と触れ合っている人が、災害のときには、実は非常に有効に機能します。



筑後川支川の氾濫の様子

平成29年7月の九州北部豪雨では、大水害が過疎地域で起き、その被災経験をどのように次世代につないでいくかが大きな課題となりました。この災害では人工林が非常に悲惨な被害状況であったことから、山の状態をどうするかが大きな問題だとわかりました。ダムや砂防堰堤は災害対策として大きな役割を果たしましたが、人工構造物は限度を超えると有効でなくなる場合もあります。

災害復旧の制度では、ある一定レベルまでは助けることができますが、やはり全てを助けることはできないため、そこで、実際に災害に遭われた地域の方と行政との間に苦しい葛藤が生まれることとなります。

今後、地球温暖化の影響により従来とは全く異なるタイプの災害が起きることが分かっている中、これからは大きな洪水氾濫が起きた時に、どこから水が流れてきて、それをどのように防ぐかという考え方をもっておくことが集落の防災において非常に重要になります。

**背景 -集落会議開催の経緯-**

**平成29年九州北部豪雨・朝倉市等で甚大な被害**

地区別復旧・復興推進協議会  
→住民一人一人の思いの反映困難

東林田集落→7月末に集落会議開催  
↓  
多くの集落に広まる

また、大きな災害が発生すると復興推進協議会が開かれますが、この協議会では自治協議会の代表者2名が委員となり、行政と協議をおこなうため、なかなか深い話し合いにな



21世紀は環境の時代と言われ、自然再生推進法やさまざまな環境政策が行われてきましたが、2011年の東日本大震災からの復興へ向けて、国土強靱化の政策が出される中で、環境への意識が薄れた時期もありました。

しかし、2015年に仙台で開催された国際防災会議において、「防災力の強化が重要であり、各地域が結びついて助け合う仕組みをつくるためには環境と防災の融合が必要である。」ことが示され、一つの世界の潮流になってきました。

私たちの社会的ゴールは、持続的な社会をつくり、より魅力的な地域をつくっていくことであり、そのためには、環境と防災の融合が非常に重要であるということを実感しています。

これからも類を見ないような災害が発生することは確かで、人工構造物や行政の対応には限界があります。そのときにコミュニティーの力が重要ですが、どのように対応していくかは、これからの課題です。いずれにしても、環境への配慮は復興時には必須であり、地域の環境を良くし、その過程で人々が結びつくことや、また都市部においても緑や浸透する地面を増やすような総合治水により防災につなげることが、一つの解決策であり方向性であると考えています。

私は河川の生物や環境について、特に水の中に棲んでいる小さい昆虫が専門分野です。川でどうやったら、そのような生物が棲みやすいのかということの研究をしています。今日は日頃の研究テーマと川づくりを合わせて、お話をさせていただきます。

さて、兵庫県はとても恵まれており、神戸のような大都会でも、少し足を延ばせば子供たちが目を輝かせて遊べる場所がたくさんあります。

観察会など川にかかわる機会をできるだけ多くのところでつくるのが、「ひょうご・人と自然の川づくり」の取組の一番根幹であると思っています。近くにいい川があるということが、川を理解し、それが防災にもつながると思います。



人々の暮らしの近くを流れる 兵庫県五国：南北に広く多様な流れ

上図(右)の説明:兵庫県内は、南北に広く、多様な河川が流れていることを示している河川位置図(河床勾配の区分による色分けを行っている。)

兵庫県では、平成8年に「ひょうご・人と自然の川づくり基本理念・基本方針」を策定し、非常に早い段階から「生態系」という言葉が登場しています。これは他府県ではなかなか見られないことだと思います。この基本理念に従い、兵庫県では今でも非常に多くの魅力的な取組を行っています。

千種川は、大変多くの方がキャンプ場などに訪れますが、魚や水生昆虫の種類も非常に多く、利用と保全のバランスが実に良くとれています。

円山川水系の建屋川は、NPOや自然保護団体の方がオオサンショウウオの保全のため、災害復旧時に、「多自然川づくり」を大変精力的に行われた場所です。現在も非常によく機能しており、ここでの川づくりの経験が兵庫県の様々な場所で災害復旧事例に反映されています。

人々の暮らしの近くを流れる川の例として、阪神武庫川駅の南側では、下流域にも関わらず、水がきれいで泳いでいる人がたくさんいます。こうしたことがもっと認知されれば、川に関心を持つ人が増えるのではないかと思います。

兵庫県は五国と言われており、北から南まで広く、非常に多様な川があり、それぞれに合わせた川づくりを行っていく必要があります。そのためには、勘に頼るのではなく、理念と方向性をもって、科学の知見を用いた技術を適用した川づくりを行うことが重要です。



加古川水系の杉原川は、震災復興と同時期に親水空間としても整備された多自然の川です。ここには5種類の絶滅危惧種の魚が今でも生息しており、観察会をすると子供たちでも絶滅危惧種を簡単に採集することができます。

こうした取組を広く進めるために、「ひょうごの川・自然環境調査」を実施しています。平成15年にマニュアルを作成し、このマニュアルに基づく調査の実施により現状を把握することで、河川整備の際には事前調査を実施する前に、配慮すべき種の有無などが分かるため、生態系にとっての危機を回避できるようになりました。

なお、この調査は間もなく2巡目が終わりますが、全県のデータベースとして蓄積されており、国内外でも他の追随を許さないレベルの調査になっています。2回の調査結果を比較し、チェックができる体制は国や他府県には全くない仕組みだと思えます。

また、標本は博物館にストックしており、子供たちの教育や、樹脂性の触れる標本として活用するといった形で、環境教育や博物館の展示にもつながる取り組みとなっています。

調査結果を健康診断図という地図形式でとりまとめ、水が汚れている箇所や魚の種類が多い箇所、街の近くで絶滅危惧種が多い場所などを示し、工事の際には工夫が必要となる場所等が確認できるよう、分かりやすく情報提供しています。例えば、武庫川上流域では、その情報を活用して生態系への配慮が行われたことで、工事後1年以内に植生の回復やすべての絶滅危惧種の保全が確認されました。

## 県内の各地で多自然川づくりが展開されはじめる

当時生息していた淡水魚は、絶滅危惧種も含めてすべて生息



災害復旧時の環境配慮と親水空間の確保  
加古川水系杉原川（加美町）

## ひょうごの川 自然環境調査の実施



・ 展示や研究、教育普及への活用

## 自然環境アトラス

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/ks13/kankyochosa.html>



・ 調査の成果はテーマごとに集計整理し、地図化されています

詳しくは下記 URL 参照

<https://web.pref.hyogo.lg.jp/ks13/kankyochosa.html>

## 安室川水系でのチスジノリの再生



「フラッシュ放流」と「川を耕す」取り組み  
→ 上流にダムや堰が多いので、人工的に攪乱を与える  
→ 地元の団体（山野里なんでも探検隊）や上郡中学校の生徒たちが活躍する

また、兵庫県では自然再生事業にも非常に先進的に取り組んでいます。

安室川のチスジノリの保全では、フラッシュ放流や中学生が川の中を暴れまくって石をひっくり返すという「人工洪水」を起こして川を耕すことによる再生の検証が行われました。その時に中学生だった人が、いまでは教員をされている方もおられます。その方々がもう一度この川づくりで川の魅力を伝えてくれると、チスジノリ保全の循環につながっていくと思います。

円山川水系の自然再生では、人工湿地として掘削したところをコウノトリが見事に利用しています。治水対策を行いながらコウノトリが集う湿地環境を再生した事例として、全国の様々な河川で適用されており、兵庫県発の技術の一つと言えます。合わせて、工夫された魚道も非常に丁寧に整備されています。「何としても魚とオオサンショウウオを残す。」という努力を県と国が一体となって行ったことが、この円山川で、本当に地に足のついた取組として結実しています。

都市河川においても様々な工夫がなされています。

新湊川では、工夫を施したところにウナギやカニが生息し、コンクリート三面張りの川でも子供がウナギやカニをとっています。

住吉川では、「小わざ魚道」による上手なりノベーションが行われ、以前より多くのアユが遡上しています。

洲本川では、災害復旧工事において干潟の保全および魚道設置を行った結果、生物の種類が増加したと報告されており、「工事＝環境負荷」ではなく、治水対策自体が生態系にとってプラスに働くことがあるという事例です。

その他では、エコロジカルネットワークとあって、自然再生上、川でどの場所が特に重要かということ事前にマップにして表しています。このエコロジカルネットワークによる川を面として捉えた生態系ポテンシャルの評価は、円山川をモデルとして、国土交通省のモデルとしても展開されています。

### 円山川水系での自然再生事業

円山川水系自然再生事業  
激特の対応として、治水面での河道断面の確保と環境面での湿地再生に取り組む

### 都市河川でも様々な工夫がなされる

新湊川（神戸市兵庫区） 住吉川（神戸市東灘区）  
小さな工夫を設計段階から盛り込んだり、後付けのリノベーションによって自然環境に配慮

### エコロジカルネットワーク

円山川盆地での生態系ポテンシャル評価  
全国規模でのコウノトリ生息適地シミュレーション  
川を面として捉え、生態系のポテンシャルを評価。国土交通省の施策として、現在、全国に展開中。

次に、最新の話題です。市川の飾磨井堰では、斜め堰という伝統工法が数値解析により治水・利水上の効果とともに、淡水魚の隠れ場となっていることが確認されており、こうした伝統工法が治水・環境の両立を実現していることが見事に示されました。

また、水路や川に石を積むなど「小さな自然再生」の取組も各地で実施されています。事例としては、ブロック積みによるオオサンショウウオの魚道整備、豊岡市田結地区の置き石による湿地湛水などがあります。



ブロック積みによるオオサンショウウオの魚道整備



豊岡市田結地区の置き石による湿地湛水

人材育成については、博物館は教育機関ではないので、正規には学生は来ないのですが、駆け込み寺的にやってくる全国の大学生を受け入れています。川づくりの取組を通して、博士論文や修士論文を書いて頂いた結果、様々な大学や研究機関で活躍する人材が育っています。

今後は、「川づくりに関する人材育成」、「川づくりに関する情報発信・展示」、「地域の教育ツールの作成」、「お金をかけずに少しずつでも、地域に広く展開できるような小さな事業」などに一層取り組み、博物館と地域の人がしっかり関わりあうことで、川を上手に活用できる人が増えていけばよいと考えています。

## 4 パネルディスカッション

### 道奥康治・法政大学 教授

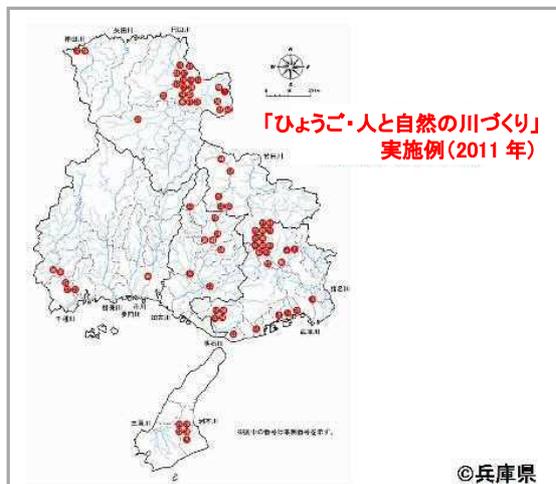
パネルディスカッションのお題は「川の魅力発見と未来へつなぐ川づくり」ということです。背景としては、平成9年に河川法が改正され、治水・利水に加えて環境も管理目的化されたことと、住民が河川整備に参加して意見を言う、という点があります。

そして、兵庫県では、河川法改正に1年先立ち、平成8年に「ひょうご・人と自然の川づくり基本理念・基本方針」を策定し、それに基づいて川の管理、整備を進めてきました。また、そのアクションプランとして平成14年に推進方策がつくられました。1980年代から全国的に川の環境を取り戻す取組が進んできましたが、大きな転機は平成18年の多自然川づくり基本指針です。

さらに、兵庫県では他の自治体に先駆け、平成24年に総合治水条例を策定しました。これは、河川工事だけでなく、治水に資する方策・施策であれば、河川技術者だけでなく、県民自らも責任を伴いながら、あるいは認識しながら、県・市町・県民が相互に連携・協働して総合治水を進めていくという非常に大きな意味を持つ条例です。

人と川とは、常に関わりあいながら、川の管理あるいは川との付き合いが進んでいくという、いわば「ふるさと」という概念です。

本日は、パネリストの方々に日頃の活動内容などを紹介していただき、これからの川づくりへの提案なども頂戴できればと思っています。



「ひょうご・人と自然の川づくり」実施例の位置図

図出典:「ひょうご・人と自然の川づくり事例集 2011」※  
※詳しくは下記 URL 参照  
<https://web.pref.hyogo.lg.jp/ks13/documents/000184982.pdf>

## テーマ① 「ひょうごの川の魅力の発見」

### 小谷正美・田君川バイカモ保存会 前代表

新温泉町に流れる田君川は県の絶滅危惧種Bランクのバイカモの生息地となっています。キンポウゲ科のバイカモ花は、約1~2cmの小さい花で、梅の花に似た白い花を咲かせて「清流の目安」と言われています。

田君川では、かつてバイカモが群生していましたが、昭和後半にヨシが繁茂するような状態になり、一時は全滅状態でした。しかし、平成12年の河床整備によるヨシの全撤去をきっかけに、バイカモの移植を行いました。また、川の水が少ないということで、小さな石を集めて堰をして水位の確保を図るなど、周辺環境の保全を始めました。

取組の継続性を考慮して、集落38戸の全戸を対象とするバイカモ保存会を立ち上げて活動することとしました。活動においては、川の水量が少ないことと、特定外来種のオオカワジシャへの対策が大変です。

田君地区では従来、地元独自で行う祭りはなかったのですが、バイカモを保護することで観光客も来られるようになり、バイカモまつりを行うようになりました。このバイカモまつりの中で、バイカモを使ったとち餅、ちくわ等を特産品として販売するようになりました。



### 田君川のバイカモと田君地区



バイカモ(梅花藻)、川面に浮かぶ小さな花が咲き、清流の目安とされ、冷たくてきれいな水が条件とされている。  
(キンポウゲ科の多年草)

### 田君川バイカモ保存会の活動



年5回程度、河川内の雑草取り・周辺の草刈作業



### 平成27年バイカモまつり



## 五名和雄・平福地域づくり協議会 会長



兵庫県が一番西部の西北部に当たり、佐用の中心から約6km北に上がったところが佐用町平福地区です。

平福では、昭和49年に大きな水害があり、石積護岸にコンクリートブロック護岸を覆いかぶせる対策が予定されていましたが、当時、地元の町会議員と住民の努力により、瓜生原邸など土蔵群の周囲約80mにおいては、石積護岸がそのまま保護されました。昭和58年には佐用町に歴史的環境保存条例ができ、行政と地域住民によって景観が守られてきました。

平成21年災害では、景観に配慮した復興を検討するため、平成22年に県・町・地域住民で構成された景観検討会が立ち上げられました。検討会における議論の結果、佐用川の左岸と右岸の一部を全て石積護岸にすることとし、左岸の川沿いには遊歩道を約900m設置することになりました。

地域の団体が地域の資源を見つめ直すような活動をするために、平福まちづくり会を立ち上げました。そして、平福の観光の虎の巻と言える冊子『ひらふく再発見！！』\*を平成22年に作成しました。平成23年には県の歴史的な景観形成地区に指定され、平成28年からは1年かけて地域資源を生かしたまちづくり企画を検討し、平成29年度から実施しました。

今後も、県や町の支援を受けながら、地域資源を生かしたイベントを継続的に実施し、歴史的な景観遺産を活用して地域住民が主体的にまちづくりを行い、地域の活性化を図っていきます。

### 遊歩道完成記念イベント



### 平福宿町並みの散策



### 平福地区 佐用川の川端風景

平成29年



昭和45年頃



※『ひらふく再発見！！』については下記 URL 参照  
[http://hirafuku.net/contents/discover\\_hirafuku\\_10.pdf](http://hirafuku.net/contents/discover_hirafuku_10.pdf)

## 白神理平・武庫川流域圏ネットワーク 事務局長

1990年代に武庫川ダムに関する議論が行われました。平成12年に至って、兵庫県はダムを白紙に戻して一から考え直すという考えを示されました。平成16年に武庫川流域委員会がスタートし、平成23年に河川整備計画が策定され、現在、これに基づき河川整備が進められています。

武庫川流域委員会に属していた委員の方々十数名が中心になって、流域の団体や市民に呼びかけ、平成23年7月に武庫川流域圏ネットワークが設立されました。

主催行事としては、河川敷の掃除と特定外来種のおオキケンケイギクの駆除です。また、毎年、活動報告会を実施し、活動状況発表とポスター展示、講演会などを行っています。



武庫川流域圏ネットワーク 設立や主催行事

- 1990年代 武庫川ダムに関する議論
- 2004年 武庫川流域委員会
- 2011年 武庫川の河川整備計画（20年間）
- ◆ 2011年 武庫川流域圏ネットワーク 設立

新規ダムなし、安全・安心の魅力ある武庫川を求める市民活動

- ◆ 主催行事 河川敷お掃除会と特定外来種オオキケンケイギク駆除

所属団体の主な活動の紹介

## 田中ひろみ・赤穂市立高雄小学校 教頭

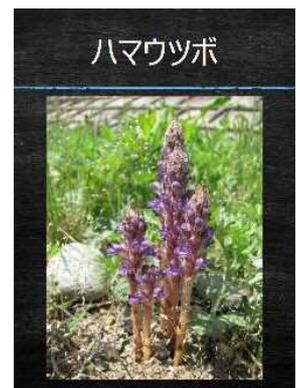


県内で最も西に位置する千種川、その下流にある赤穂市立高雄小学校です。小学校の東側の河川敷には、兵庫県の絶滅危惧種Aランクに指定されている植物ハマウツボが自生しています。ハマウツボは寄生植物で、5月初めから中旬に紫色の花を咲かせます。兵庫県では、赤穂市の高雄と淡路の成ヶ島にしか自生していない植物で、この2カ所に共通した環境は、砂、小石、汽水ではないかと考えています。

高雄の清流と河川敷は、海と川を往来する多くの生き物の通り道や休憩所となっており、希少動物も発見されていたことから、県民局も水辺づくり事業に力を入れていたようです。平成16年、行政主導で自然観察区域整備事業が行われ、高雄地区水辺づくり協議会が発足しました。

現在は光都土木事務所のご支援をいただきながら、市の建設課・環境課・教育委員会指導課などが協議会に所属しています。

高雄の自然観察区域は県内最大のハマウツボ自生地であることから、河川敷全体の生態系をある程度維持し、子供たちの学習や研究に生かした



いと考えています。子供たちの学習のために力を注いでくださる皆様の力で、ハマウツボは3,000個体以上まで増やすことができました。

小学校では、自然観察区域を含む河川敷一体を「川の駅」高雄と名づけ、毎年6年生が中心となり、総合的な学習の時間にハマウツボの調査や保全の活動をしています。

P T A、地域の方々、行政に支えられた子供たちの活動は環境教育の役割を担っており、環境保全に対する意識の醸成を図っています。川をフィールドとした学習を通じて、持続可能な社会の構築につながる見方や考え方を子供たちに育てていくことを目指しています。



佐川志朗・兵庫県立大学大学院 教授

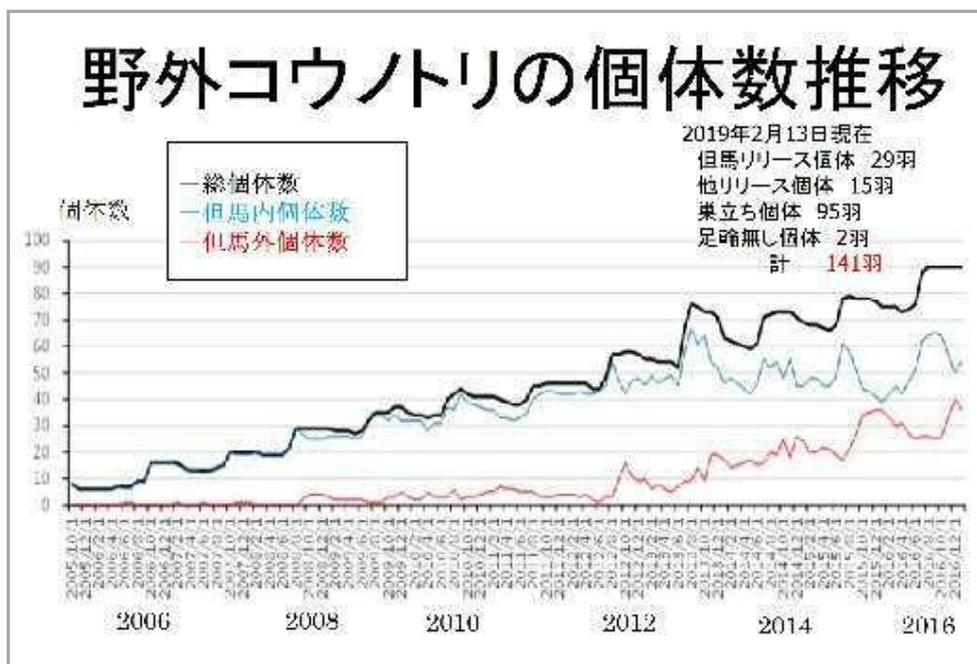
円山川の魅力は、コウノトリの野生復帰事業と合わせて官民学の連携による湿地づくりを推進していることです。昭和46年に、コウノトリは一度絶滅しましたが、外の個体を持ってきて繁殖させるという試みをしました。平成17年からコウノトリの野生復帰を始め、現在は日本全国に141羽がいるという状況です。

我々が最も危惧したのは、野生復帰後にコウノトリが餌場を確保できるのかという点でした。そこで、平成16年の大水害の激特事業を契機に、応急処置的な川の改修を行うのではなく、コウノトリの野生復帰を見据えて自然に配慮した川の改修を行ってきました。



具体的には、川の中に河道内の氾濫原として湿地をつくり、河道の外にもビオトープをつくりました。それらの流域を有機的につなげるということを実施してきました。

事例として加陽湿地を紹介します。この湿地は出石川下流部に形成された氾濫原湿地で、2年に1度の割合で「水に浸かってもいい場所」として整備しました。



三橋弘宗・兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員

これまで紹介された兵庫の川づくりの魅力についての補足ですが、丹波市でも田君川の例にならいバイカモの保全の取組を展開しています。県内で情報交換を行い、連携しながら取り組んでいる点が魅力的です。

## テーマ② 「地域の特性や課題に応じた川づくりのあり方」

### 小谷正美・田君川バイカモ保存会 前代表

田君川において、今後、取り組むべきことは、水温が高くなる部分があることや水の流れがないことへの対応が挙げられます。

活動して良かったことは、バイカモが一部復活できたことをきっかけに集落の全戸がバイカモ保存会として共同で活動できていることです。学校等とも連携し、保存会だけの活動ではなく河川の維持管理や生き物調査などを行っており、その活動が自然環境保全につながっています。また、バイカモまつりには多くの人が訪れ、地域の活性化にもつながっていることです。



### 五名和雄・平福地域づくり協議会 会長

山城跡や御殿屋敷跡、佐用川沿いの歴史的な景観があり、この3点がコンパクトに集約されているのが地域の一つの特徴です。また、佐用川の裏街道や旧因幡街道の家並み、その石積みの上に建つ土蔵群やそれら土蔵群が佐用川の川面に映る景観は次世代に残していきたい景観です。

活動については、毎年7月か8月の第1日曜日に地元住民が主体に草刈り、ゴミ拾いをして、町並み・景観を良くしようとしています。また、御殿屋敷の跡（約4,000m<sup>2</sup>）は地元の佐用高校の生徒さんに、環境整備の一環として草刈り作業をして頂きました。

今後は、地域の少子高齢化や大都市への人口流出という状況下で、役員の高齢化もあり、後継者を早急に確保しなければならないという課題があります。



白神理平・武庫川流域圏ネットワーク 事務局長

篠山市の「環境みらい会議」が仁川合流点でのネットワークお掃除会に参加のケースがありました。上流・下流の貴重な交流体験でした。

津門川の月例お掃除の団体は掃除の後、「津門川塾」を開き、市民と研究者が集まる学びの場等も開催してこられました。

また、千種川や円山川における他団体の活動を見学し、流域間の連携を図りながら、武庫川にも生かそうという活動をしている団体もあります。

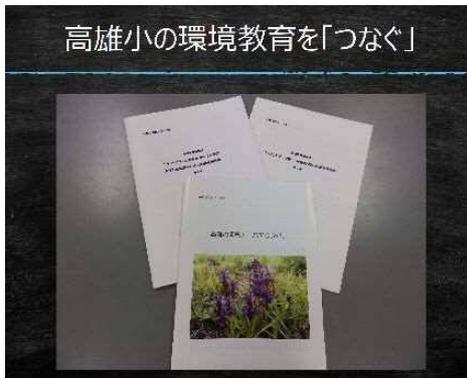


市民と研究者の学びの場(津門川塾)の紹介など

※スライド左下の写真:津門川では住民要望により2003年に県が階段式魚道を設置し、現在も鮎が上流まで遡上している。

田中ひろみ・赤穂市立高雄小学校 教頭

子供たちの学びを深めていくためには、取り組みを蓄積し「つなぐ」工夫をすることが環境教育と環境保全の両面において求められています。



作成した環境教育の学習教材

このため、学校がハマウツボ学習の教科書を作成し、学習ボランティアが河川敷の生き物をまとめた冊子の発行を行っています。これらは、本校の学びを次世代につなぐ役割を果たしています。

さらに、学習ボランティアから、データ収集や分析の方法、植物同士の相関関係などの科学的な知見を与えていただくことで、子供たちが主体的にハマウツボの個体数調査や、ハマウツボの成長促進を図る芝剥ぎなどの保護活動に参加しています。

一方で、河川敷保護に長く携わったボランティア団体が、昨年度、高齢化を理由に解散しました。今後は、学習ボランティアの後継者やリーダーの育成が課題です。地域の熱意だけに頼らない環境保全のあり方を守りたいと考えています。



ボランティアによる河川敷整備の様子



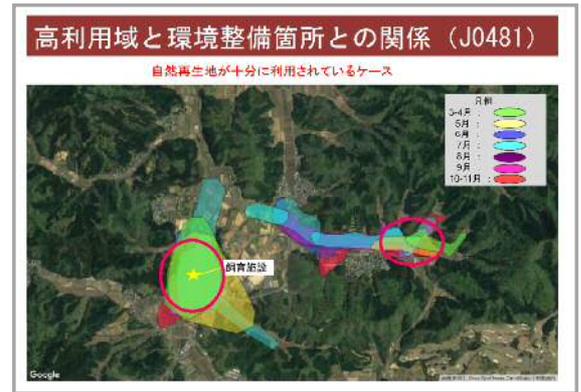
子供たちの調査発表の様子(上)  
ハマウツボの成長促進を図る芝剥ぎ(下)

佐川志朗・兵庫県立大学大学院 教授

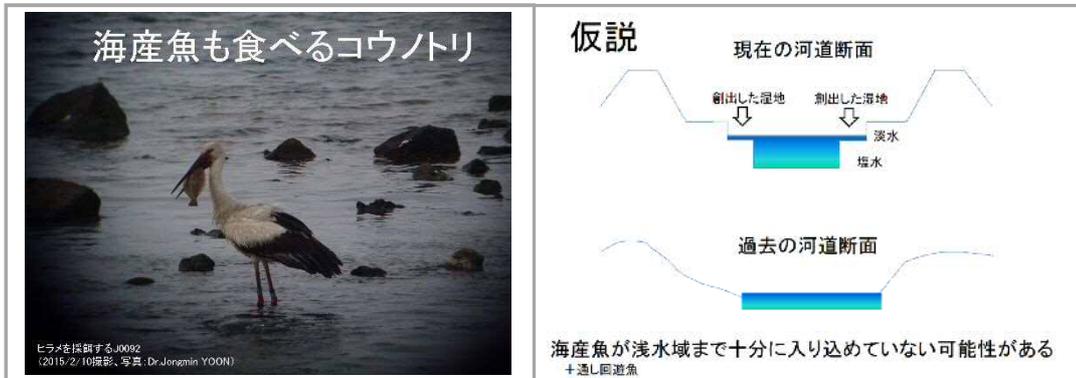
コウノトリの行動圏に関する研究・分析の結果から、2点の課題があると考えています。

まず1点目は、様々な自然再生の取組を行っていますが、コウノトリが、その自然再生を行った場所のうち、利用していない場所もあるのではないかとということが挙げられます。

2点目は、コウノトリはヒラメなど海の魚も食べるため、海域との連続性も非常に重要なことなのですが、昔の自然の河道断面に比べると、自然再生の取組で整備された今の河道断面は魚が入り込む浅い水域の横断方向の広がりが狭いことから、海域においては縦断方向の連続性はあるものの横断方向の連続性が乏しいことが仮説として挙げられます。



高利用域と環境整備箇所との関係



海域における横断方向の連続性に関する仮説

### テーマ③ 「ひょうごの川づくりの未来」

小谷正美・田君川バイカモ保存会 前代表

河川の水量が少なく、水深が浅いため、バイカモを移植しても根づきにくく、成長しない状況が数年続いています。バイカモまつりもここ2年間、中止となりました。こうしたことから、河道内の中央部分の河床掘削などにより水深の深い箇所を確保し、バイカモが成長できるような環境を整えることが課題です。

また、バイカモは町の観光資源となっており、行政も積極的に関わってほしいと考えています。



河道内に土砂が堆積している様子

**五名和雄・平福地域づくり協議会 会長**

佐用川とその周辺の歴史的な遺産を観光資源として活用し、今後も住民主体のまちづくりを進めていきます。

河川改修工事により災害に強い川にはなったものの、水生生物が住みやすい環境と共存・共栄した景観まちづくりを進めていきたいと思っています。

また、地域の将来を見据え、子供から高齢者まで全ての住民が安心して楽しく暮らせる活気あるまちづくり、宿場町平福の風情がある調和のとれたまちづくりをしたいと考えています。



**白神理平・武庫川流域圏ネットワーク 事務局長**

武庫川下流には河川整備計画に基づき潮止堰の撤去が計画されておりますが、その撤去により汽水域が広がることで魚類等の移動の連続性が向上し、生物相は豊かになっていくと思われます。

こうした中、私見ですが、武庫川が「プラごみ」を出さないモデル河川になることを希望します。

オランダで実用化されている川底から気泡を出すシステム(TGBB: The Great Bubble Barrier)を導入して、泡の力により「プラごみ」を回収することはできないでしょうか？



これからの武庫川に期待する姿など

**田中ひろみ・赤穂市立高雄小学校 教頭**

単なる川遊びに終わらず、問題解決を通じて環境を捉える視点を明確にできるようにしたいと考えています。

学校で川を環境教育に生かすために、①学びの素材と安全な環境があること、②専門的な知見から新しい視点を与えるアドバイザーの確保、③景観や機能を維持管理するための共同組織の確立が必要です。

川のことやハマウツボのことを学んだ子供たちが大人になり、環境保全の担い手になってくれるとうれしいです。



ハマウツボ保護活動報告の準備

佐川志朗・兵庫県立大学大学院 教授

コウノトリの個体数を拡大するためには、兵庫県全域はもちろん、全国においてコウノトリが住めるような環境、湿地の整備を進めていく必要があります。

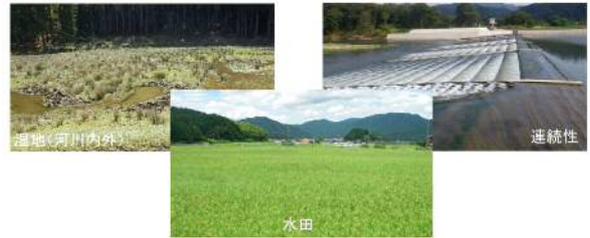
流域全体の大きなスケールで水田や湿地等の連続性を確保していくことにより、コウノトリが増えていくと考えています。

円山川の事例は全国的にも注目されており、兵庫県内だけでなく全国、世界へ紹介していくことが私の任務と考えています。

テーマ③ ひょうごの川づくりの未来

今後の川づくり

→コウノトリ個体群を拡大するためには、兵庫県全域さらには全国における水辺づくりの推進(環境収容力の向上)が必要



三橋弘宗・兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員



防災や野生生物の保全では、洪水時や渇水時に少しでも逃げる場所があるということが重要であり、科学的な知見をもとに現況に少し手を加えるような丁寧な取組が必要と考えています。

今日のような場をもう少しフランクにした機会を年に1回設けることができれば良いと感じました。

## ○全体総括

### 島谷幸宏・九州大学大学院 教授

兵庫県の活動は素晴らしいです。それぞれの地域で環境が異なるので、非常にバラエティーに富んだ活動が行われていると感じました。各団体が互いの活動を知る機会、情報交流するようなネットワーク組織があれば、災害時にも役立ちます。

また、環境保全に対する取組の中に、防災の観点がもう少し加わると良いと感じました。特に、武庫川は流域治水を進めており、流域で水を貯めるような活動、新しい活動へ展開されると良いと感じました。大きな災害が起きた時、環境面で重要な場所は残すといった仕組みがあると、今回紹介して頂いたような良い事例が様々な場所で生まれていくと思います。



### 道奥康治・法政大学 教授



川というのは原自然ではなく、人の手が入った二次自然であり、「ふるさと」という言葉はそれを体現していると思います。そういう意味で、川そのものがグリーンインフラであると考えられます。

今日の発表で、各地域における各活動を内外に発信していくために、地域の価値をブランディングすることが必要であると思いました。そのためには世代間あるいは地域間をつなぐことも1つの方向性であると思います。

また、「川づくりを通じて人をつくっていく」、あるいは「人づくりを通じて川をつくっていく」、

「次世代を育てて川をつくっていく」といったことが必要と考えられます。広い意味でのブランディングというのは、皆が価値を共有する上では必要なことと言えます。

以上から、地域、世代間を「つなぐ」こと、地域の価値を共有する「ブランディング」、川と人を育てる「川づくり、人づくり」をシンポジウムの提言とさせていただきたいと思います。



## 5 パネル展示

兵庫県において、「基本理念・基本方針」に基づき進めてきた「ひょうご・人と自然の川づくり」に関する様々な取組や、本シンポジウムの後援・協力団体である関係機関（国土交通省近畿地方整備局、(一社)建設コンサルタンツ協会近畿支部）から情報提供いただいた「多自然川づくりの取組事例」などをパネル資料として展示しました。



### 展示パネル（抜粋）

〈 兵庫県 〉

ひょうご・人と自然の川づくり 生態系に関する基本方針

<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">①ハイカモの保全(田君川)</p>	<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">②ハマウツボの保全(仲種川)</p>	<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">③災害復旧助成事業(出石川)</p>
<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">④コウノトリへの配慮(出石川等)</p>	<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">⑤水辺の小わざ魚道(住吉川)</p>	<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">⑥魚道整備(緊急河運対策[千種川水系])</p>
<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">⑦ひょうごの川自然環境アトラスweb版</p>	<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">⑧オギ原に配慮した河川整備(武庫川)</p>	<p style="text-align: center; background-color: #4CAF50; color: white; padding: 2px;">⑨弁天淵の再生(矢田川)</p>

## 展示パネル（抜粋）

〈 兵庫県 〉

ひょうご・人と自然の川づくり



### ふるさと桜つつみ回廊

川を身近な自然として愛し、安全で美しい県土を創出するとともに、地域交流を深めてもらいたいという願いを込めて、平成3年度から平成12年度にかけて、瀬戸内海から日本海を結ぶ延長約170kmの河川沿い（武庫川～篠山川～加古川上流～円山川）を約5万本の桜でつなぐ「ふるさと桜つつみ回廊」を整備しました。また、回廊上には、地域住民の憩いの場、地域交流の拠点として、「たけだお」「ひかみ」「きのさき」の3ヶ所の「さくらの名所」を整備しました。

**但馬地域**

大瀬川(豊前市 城崎温泉)のさくら

**丹波地域**

篠山川(篠山市東沢)のさくら並木

加古川(丹波市水上市橋山)のさくら並木

**阪神地域**

武庫川(三田市黄志)のさくら並木

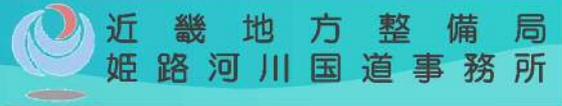
加古川(高砂市)のさくら並木

ふるさと桜つつみ回廊

# 展示パネル（抜粋）

〈 国土交通省近畿地方整備局 〉

## 加古川自然再生



加古川における特徴的な生物の生息、生育、繁殖の場として、「瀬・淵」、「わんど・たまり」、「礫河原」、「水際植生」、「河口干潟」があります。これらのうちわんど・たまりは、魚類の産卵場・初期育成の場であるほか、タナゴ類の産卵母貝となる二枚貝類が生育し、また、出水時の魚類の避難場として重要ですが、過去と比べると減少傾向にあるため、再生・創出に取り組んでいます。

さらに、加古川では魚類や甲殻類の移動の妨げとなっている堰等があるため、調査により詳しく実態を把握した上で、魚類や甲殻類が登りやすい魚道について検討しています。

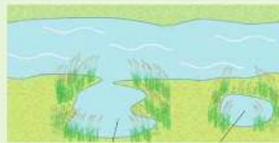
### わんど・たまりの再生

加古川では、生物の生息・生育の場として重要なわんど・たまりの周辺が樹林化しています。これにより、わんど・たまりが縮小・消失したり、水交換の悪化等が生じることから、わんど・たまりの再生を行っています。

#### わんど・たまりとは？

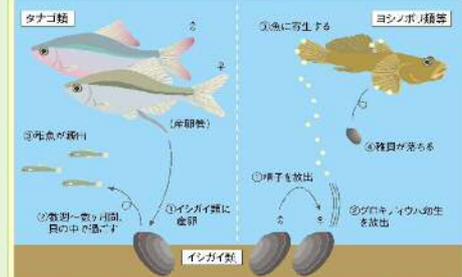
本流のそばにある、流れのほとんどない、浅くておだやかな環境。

▶速い流れが苦手な小魚、仔稚魚のすみか  
流れがゆるやかな上、小魚を食べる大きな魚が入って来れないため、準絶滅危惧種(環境省レッドデータブック)のヤリタナゴやカワヒガイなど、全国的にも貴重な小魚や、コイ・フナ類の仔稚魚のすみかとなっています。



わんど たまり

#### ■タナゴ類の産卵には貝が必要です



出典：「ARRCNEWS11～二枚貝の減少と再生への道」  
(独) 土木研究所自然共生センター、2010)

#### ▶タナゴ類の産卵場

ヤリタナゴなどのタナゴ類は、貝に卵を産み付け、貝の中で子供時代を過ごしますが、産卵に使われる貝類は、泥がたまるようなおだやかな場所にみられます。



ヤリタナゴ



カワヒガイ



イシガイ

#### ▶出水時の魚類の避難場

#### 良好なわんどが減っています



わんどに樹木が繁茂

- 木が生え、土砂がたまるなど陸地化が進み、干上がりやすくなり水交換が行われないなど、環境が悪化

#### 取り組み: わんどの創出



わんどの創出

7.9k左岸 (H25施工)

- わんど・たまりが消失した場所、環境が悪化した場所など19か所を対象に、樹木伐採、掘削などによりわんど環境を創出。
- 6か所施工済み。(平成29年現在)



7.9k右岸 (H25施工)

#### 【平成25年につくったわんど】

- 小魚の利用しやすいおだやかな環境となりました。
- 泥を好み、タナゴ類の産卵に必要な貝もみられます。



スマガイ

## 上下流の連続性の再生

加古川水系の国管理区間に存在する9か所の堰等のうち、4か所について魚道の設置や改良を行い、魚類等が移動できるようにすることで、魚類等の生息・育成・繁殖環境の改善・復元を図ってきました。

#### 取り組み: 魚道(魚がのぼるための階段)の設置・改良

段差が大きくて魚が川を登れなかった4か所の堰に魚道を設置し、調査しながら改良を加えてきました。現在もモニタリングを続けています。(平成29年現在)

##### 右岸側の魚道



H20改良

##### 中央の魚道



H22改良

#### こしんえんてい 古新堰堤

高くてのぼれない

#### ■魚道をのぼるアユ

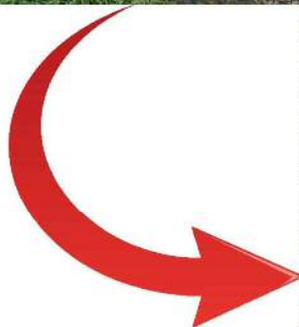


## 展示パネル（抜粋）

〈（一社）建設コンサルタンツ協会近畿支部〉



\\ 建設コンサルタントの仕事 \\  
多自然型川づくりの事例紹介



# オオサンショウウオと 地域住民が共生する魚道整備

対象河川は、地域住民によるオオサンショウウオ生息環境の保全活動が推進されていました。

本事業では、魚類および両生類の遡上や棲みかづくりに配慮した河川環境整備として、

既設落差工を改良し魚道工を設置しました。

魚道工の形状は、生物環境アドバイザーの意見を反映すると共に、既設落差工の改築は行わず、工事費の軽減、簡易な施工方法を採用しました。

## 『川のある風景 フォトコンテスト』 入賞作品

ひょうごの川の魅力を伝えるとともに、川の魅力を再発見し、未来へつなぐ川づくりの機運の醸成を図るため、「川のある風景フォトコンテスト」を実施し、入賞作品を決定しました。

- 1 募集テーマ 県内の河川における、地域の個性豊かな風景
- 2 応募総数 273点
- 3 審査委員会  
委員長 兵庫県写真作家協会最高顧問 もりい ていじ 森井 禎紹  
委員 甲南大学文学部教授 でぐち あきこ 出口 晶子  
委員 兵庫県県土整備部土木局長 服部 洋平
- 4 委員長総評 川を主役とした四季折々の美しい風景をテーマにした写真の数々、川と人の共存する生活感の出た作品、また、川を生活の一端とした催しや祭り、行事等々、こんなに川との関わりがあったのかと思う視点で切り取られていました。私達が若い頃、水遊びをしたり、土手に座って川岸の花を見つめ心を癒やした思い出をよみがえらせてくれたコンテストでした。

### < 最優秀賞（知事賞） >



『清流に咲く梅花も』（田君川） 羽田 薫

< 優秀賞 >



『楮の川さらし』(杉原川)  
深町 知行



『健やかに。』(揖保川)  
丸一 明



『武庫川桜並木』(武庫川)  
荒木 正夫

< 佳作 >



『家族皆で川遊び』(猪名川)  
馬場 和正



『平波穏流～黒滝～』(美囊川)  
玉井 勝典



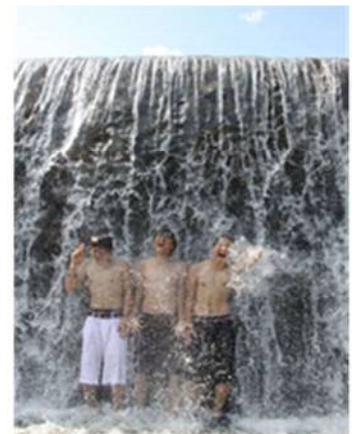
『地域と共に』(佐用川)  
藤田 郁夫



『感激 一斉放水』(武庫川)  
宮田 敏幸



『清流の初夏』(揖保川)  
金岡 明光



『都会の清流 住吉川』(住吉川)  
向井 章二

# ふるさと兵庫の川づくりシンポジウム 新聞記事

神戸新聞 (2019年3月23日・8面)



## ふるさと兵庫の川づくりシンポジウム

兵庫県取150周年記念事業「ふるさと兵庫の川づくりシンポジウム」が2月23日、神戸市立御影公会堂で開催された。県内の川の魅力を伝え、川づくりの未来を考えるパネルディスカッションに約220人が聞き入り、専門家の基調講演や、県が取り組む「ひょうご・人と自然の川づくり」の報告も行われた。



パネルディスカッション「川の魅力発見と未来へつなぐ川づくり」-神戸市東灘区御影石町4、市立御影公会堂

# 豊かな暮らし 川と共に

- コーディネーター 道奥 康治氏 (法政大学ゼミナール事務部長)
- コーディネーター 小谷 正美氏 (国用川バйкаモ保安課長)
- 佐川 志朗氏 (兵庫県立大学大学院 地域資源マネジメント研究科 教授)
- 白神 理平氏 (兵庫県立大学大学院 教授)
- 五名 和雄氏 (兵庫県加古川市 市長)
- 田中ひろみ氏 (赤穂市立高等学校 校長)
- 三橋 弘宗氏 (兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員)
- コーディネーター 島谷 幸宏氏 (九州大学大学院 教授)

道奥 1997年の川法改正で1年先立ちで設置された「ひょうご・人と自然の川づくり」基本理念を、基本方針を策定。2006年の自然川づくりの基本方針を踏襲して、川の環境を取り戻す取り組みを率先して進めている。また19年、川の自治体による川づくりの推進を策定。川と向き合う取り組みを進める。川と向き合う取り組みを進める。



道奥 康治氏

九州大学大学院工学研究科教授 島谷 幸宏氏



「基調講演 気候変動下における環境と防災の統合」



兵庫県高校生らと地元保存会が協力して行った「バйкаモ移転」地元小学生らの参加も一前盛況で、田中川

小谷氏 バйкаモ保全に行政も 佐川氏 川づくり通し交流育む 白神氏 川づくり通し交流育む



小谷 正美氏



佐川 志朗氏



白神 理平氏

### 環境配慮の安全な地域へ

「基調講演 気候変動下における環境と防災の統合」



五名 和雄氏



田中 弘子氏



三橋 弘宗氏

「川のある風景」フォトコンテスト



最優秀賞に羽田薫さん



川国に魅了された行政にも

### 川国に魅了された行政にも

兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員 三橋 弘宗氏



# ふるさと兵庫の川づくりシンポジウム



**【コーディネーター】**  
法政大学デザイン工学部都市環境デザイン工学科教授  
〈パネリスト〉  
田君川/バイカモ保存会前代表 平福地づくり協議会会長  
武庫川流域ネットワーク事務局長  
赤穂市立高神小学校教頭  
兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科教授  
兵庫県立人と自然の博物館主任研究員

**【コメンテーター】**  
九州大学大学院工学研究院教授

## 「川の魅力発見と未来へつなぐ川づくり」

パネリスト・島谷 幸宏  
島谷 幸宏氏  
小谷 五右衛門氏  
徳島 康治氏  
正実氏  
和理平氏  
志田氏  
弘宗氏

兵庫県は2月28日、神戸市の市立前野公会堂で祝賀150周年記念事業となる「ふるさと兵庫の川づくりシンポジウム」を開催した。国土交通省近畿地方整備局の中込淳河川部長らの来賓をはじめ約220人が参加し、基調講演では環境と防災を軸

合する取り組みの実践の重要性などを、取組報告では県内各地の多自然川づくり事例を学ぶとともに、パネルディスカッションでは活動の紹介を通じて川づくりの未来を考える貴重なイベントとなった。その内容を紹介する。



## 「気候変動下における環境と防災の統合」 地域で持続的社會を

川は私たちの生活の面から見て、水資源として、防災の観点から見て、環境の観点から見て、多岐にわたる役割を担っている。川づくりは、これらすべての観点から、統合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。

九州大学大学院工学研究院教授 島谷 幸宏  
島谷氏は、川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。

「川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。」

「川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。」

「川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。」

「川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。」

「川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。」

「川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。」

「川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。」

「川づくりは、環境と防災の統合的な取り組みが必要である。川づくりは、単に治水や治水対策だけでなく、環境保全や防災対策も含めて、総合的に取り組む必要がある。気候変動が進む中で、環境と防災の統合的な取り組みが、持続可能な社会を実現するために不可欠である。」

## 「ひょうご・人と自然の川づくりの取り組み」 川ごとの特性生かす

兵庫県立人と自然の博物館主任研究員 三橋 弘宗

「川ごとの特性を生かす」というテーマで、川ごとの特性を生かすための取り組みについて紹介する。川ごとの特性を生かすためには、川ごとの特性を生かすための取り組みが必要である。川ごとの特性を生かすためには、川ごとの特性を生かすための取り組みが必要である。



「川ごとの特性を生かす」というテーマで、川ごとの特性を生かすための取り組みについて紹介する。川ごとの特性を生かすためには、川ごとの特性を生かすための取り組みが必要である。川ごとの特性を生かすためには、川ごとの特性を生かすための取り組みが必要である。